

## 「打ち合わせ、10分、遅れます」

教育学部長 片岡 徳雄

Nさん——。しばらく姿を見せませんが、元気のことと思う。

君のチューターのU助教授から聞きました。君が、教育界でなく、あえて一般企業の方を選んだ、と。どの職業も厳しさにおいては同じと思うが、とりわけ企業は「生き馬の目を抜く」ところ。

「新聞社に務める教え子から、かつて聞いたことがある。「今ごろの新卒者には『指示待ち族』が多いです」と。

「指示待ち族——分かるだろう？ 上司や他人の指示がないと動かない人、自分から仕事を見つけようとしないう人、そういう受け身の人間を指す言葉。あるいは、自主的な判断を下さない人、と言ってもよいね。

「そんな汚名を着せられないよう。ただでさえ「広大生はおとなしい」「とくに教育学部生はおとなしい」など聞かないでもない昨今。心して、しっかりやりたまえ。

「つい最近、用談があってH学部長の部屋を訪ねた時のこと。H先生のあき時間は講義のすむ2時45分からわずか15分しかなく、3時からは事務部との別件の打ち合わせが予定されているとのことだった。私は少し早めに着いた。35分くらいだったかな。

「秘書がお茶を出してくれる。

「約束より早く来まして。」とわびると、「結構です。部長は時に、講義を早目に切り上げられますので、もうお帰りになるかもしれません。」

ところがその日に限って、45分になっても帰られない。

すると、<sup>ついで</sup>衝立の向こうで彼女が電話をかけ

る。

「〇〇です。打ち合わせ、10分、遅れます。よろしいでしょうか？ ……ハイ、よろしく。」おそらく、事務部への連絡であろう。それから5分も経たずして、H先生は帰って来られたが、私はこの秘書の、この処置に、たいへん感心したわけだ。

「そうだろう？ それは、約束より10分も早く現れた来客の「思い余った」「思いの丈」に答えるサービスでもあるし、10分も待ちぼうけを食わせては悪いという事務部へのやさしい連絡でもあるし、そして何よりも、命じられることなく上司の意を察してとっさに判断したことでもある。

「あるいは君は、言うかもしれない。「それが秘書の秘書たるころ。ベツニイ……」そう、そうかもしれない。しかし、言葉少なに、しかももの静かに、あちらこちらに配慮することは、とくに若い人には難しいことかもしれない。人間の素養というようなレベルに関わるかもしれないしね。

「これは、たかだか10分をめぐる「差し操り算段」のこと。だが、そういうささやかな配慮によって日常的な仕事が遂行され、それが積り積って君の職務全体の自主性となり、さらには、非日常的な問題の発見と解決を求める態度になるかもしれない。職業的社會化の第一歩は職務の主体化にある。人生の些事と大事の別なく、どうか主体的に仕事に取り組むよう。

「体だけは、うんと気をつけて。さようなら。